
招き手の少女

笙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

招き手の少女

【Nコード】

N1895R

【作者名】

笙

【あらすじ】

“招き手”と呼ばれる自然の力を操る者達がいる小さな島国。その“招き手”である少女が起こすひとつの小さな物語。

(前書き)

初投稿です。

まだまだ修行中の身の作品ではありますが、読んで頂けたら幸いです。

シェイレス王国。

五百年程の歴史を有する、周囲を海に囲まれた島国だ。

小さな島国ではあるが、聡明で慈悲深いと国民に称えられる現国王の統治のもと、豊かで活気のある国として、周辺の国にその存在を知らしめていた。

戦争による武力行為ではなく、貿易による多くの国との交流で豊かになってきた国のため、異国と通じている港にはいろいろな国の名産品があふれかえる。

そんな街のひとつ、テレジアの市場には今日も多くの露店が建ち並び、人々の喧噪が絶えなかった。

少し湿った風によってやってくる潮の匂い。耳に届く言葉には商談を交わす自国の言語と、時折異国の言語が混じる。露店の店先を彩っている様々な商品は見ていて少しも飽きることはない。

道を埋め尽くす程の人の波をひとりの少女がぐり抜けていく。ひとつひとつ店を覗きながら進むその足取りはとても楽しげだ。背中まで伸びた金髪が少女の動きにあわせて揺れた。

「ソフィ！」

声に反応して少女が足を止めたのは、道の終わりのあたりだった。店が出ていないその場所には人の姿がほとんどない。振り返った少女が見る先には、少女より2、3才年上だろうと思われる少年の姿があった。

黒の髪と瞳^め。幼さが抜け、青年のものへと変わろうとしている顔立ちは精悍ささえ感じられる。簡素だが品の良い服装がとても良く似合っていた。

「全く…。一人でさっさと行かないでください。危うく見失う所で

したよ」

「トルネ、さっきの果物屋さん見た？あそこの林檎すごく美味しそうだっと思ったと思わない？あとその前にあった衣装店は……」

「……人の話、聞いてます？」

対する少女「先ほどソフィと呼ばれた少女もとても綺麗な面差しをしている。」

年は14，5位だろうか。光を受けて輝く金髪と明るい紫の瞳が印象的だ。

今、その瞳は興奮のためかきらきらと輝いていた。

「それに、異国の人が本当にいっぱい！こんなにたくさんだとは思わなかった！」

「この市は、この国最大の交易場ですからね。品の数や他国人の出入りは一番でしょう。……でも無闇に話しかけるのはダメですよ？商談の邪魔になりますから」

「そっか……。残念」

目に見えてシュンと肩を落とすソフィに少年「トルネは慰めるように声をかけた。」

「店の中もちろんですが、今度は会話を聞いてみればどうですか？商談の中に世間話なども入っていてなかなか興味深いですよ？」

「本当っ！？じゃあ、やってみる！」

見る間に明るい表情になって、そのまま人混みの中に戻ろうとするソフィをトルネは慌てて押さえた。

「うわっ！一人で行かないでください！僕も一緒にいきますから！」
今来た道を引き返そうとする二人。だが、大人の多い人混みの中、なかなか前に進めない。それでもイライラする様子を見せることもなく、きよろきよろと周りを見回していたソフィの視線がある一カ所で止まった。

それは荷物を運ぶ少年の姿だった。店の手伝いか何かなのだろう、頭の上に果物をのせた大きなかごをのせて歩いている。だがそれは彼の体格に比べると、あまりに大きなかごだった。加えて、この人

混みでバランスを崩しがちである。それでもなんとか前に進んではいたが、大柄な男を避けようとして避けきれず、かごの端が、男の腕に当たった。

「あっ!!」

果物が宙を舞う。転んだ少年の方は周りの人が気づいて避けたが、かごから飛び出したたくさんの果物の方は、重力に従って少年の方に落下していく。どこかで小さな悲鳴があがった。

・・・

優しい風が吹いた。

地面に、少年に衝突しようとしていた果物たちがその動きをとめる。そのまま風が地面に転がるかごへと誘った。

「大丈夫!？」

地面に座り込んで、呆然としている少年のもとへ、ソフィが駆け寄ってきた。その後をトルネが追ってくる。流れを止めた人の波は、あっさりと二人の通る道をあけた。

少年を助け起こしたソフィは、服に付いた砂埃を払い落としてやりながら、怪我の有無を確かめる。どうやらなんともないようだ。判断してソフィは満足げに笑った。

「よかったあ。ごめんね、本当は転ぶ前に風を招んであげたかったんだけど…」

「怪我もないようですし、こちらは無事でした。充分だと思いますけど?」

ソフィの言葉をかごを手を持ったトルネが遮った。にっこりと少年に微笑みかけて、そのかごを手渡す。少年が慌ててそれを受け取った。

「それで、ソフィ……」

「あ、あのっ、ありがとう!お姉ちゃん、招き手なんだね!僕、リヤトっていいいます。店の品物も無事だったし、お礼させてくれないかな?」

リヤトと名乗った少年は頬を紅潮させて、早口でそう言う。 “招^エア^ナ

き手”と聞いて周囲にざわめきが広がった。

シェイレス王国に宗教や神の類は存在しない。その代わりに人々は、自然の力を信じている。火、水、風、雷、土。これらの力がこの世に満ちて、彼らの生活を成り立たせているとして、それらを総称して、精力と呼び畏敬の念を抱いている。

そんな中で、ごく稀に精力を意のままにあやつる事ができる者が現れる。それが招き手と呼ばれる者達だ。彼らは精力と共に幸運を招くとして、人々の生活にとけ込んでいた。

「え！？お礼なんていらないよ？だって、ホラ、人を助けるのは当然の事だもの。ねっ、トルネ？」

「ええ、だと思えますよ？まあ実際、僕は何もやってませんし……」
パタパタと手を振って遠慮するソフィの隣でトルネも困ったように笑う。そんな二人の手をかごを地面に置いたリヤトは握った。

「そんなことないよ。お願い、家に来てよ。父さんも母さんも妹も喜ぶよ。お礼っていつてもたいしたことはできないけど……」

「じゃあ、そのお礼は俺の慰謝料にしておらおうか？」

リヤトの声を低いガラガラ声が遮った。見れば、さっきリヤトがぶつかった男とその連れらしい男が二人、近くに立っている。三人とも体格がよく、力も強そうだ。ビクツと体を竦めたリヤトをソフィは後ろにかばった。

「さっきぶつかったときに、腕を痛めっちゃったらしくてよお。これじゃあ仕事が出来ないんだがなあ」

「そうそう。しかも兄貴は明日大事な用があるんだ。そんなときになんて事してくれたんだ、ああ？」

わざとらしく腕を押さえる男の後ろで、取り巻きらしい男がすくむ。その声に周囲の人がだんだん離れていく。それでもソフィ達を囲むように輪になっているのは、野次馬根性のあらわれか。

「この子は何も悪くないわ。あなただって腕を痛めたりしてないでしょ。もしそうだというのなら、相当に貧弱な腕なのね」

体格の差は歴然。だが、頭上から見下ろされる迫力に気圧される

こともなく、ソフィは真っ直ぐに男を見上げて言い切った。その脇で、トルネが眉をひそめて「ソフィ」と小声で呼ぶ。

「言いがかりをつけるのはやめたら？ 小さい子供相手に情けないと思うわよ？」

ダメ押しの一言。トルネの呼びかけをきっぱりと無視してソフィは男達にそう告げた。途端に男達の額に青筋が浮かぶ。

「ーんだとっ、この小娘っ！」

取り巻きの一人がが腕を振り上げた・・・瞬間、その首元にひたり、と手刀がそえられる。ただそえられたのみならず、確実に急所に触れているそれに男は動きを止めるほか無かった。

「退いてください。・・・争い事は嫌いですが、不得意というわけではないんですよ？」

前にいる・・・と思っていたトルネがいつの間にか自分たちの背後にいる。その事実到现在になるまで気づかなかった男達は明らかに動揺していた。

「ガキがっ！ 調子にのってんじゃねえぞっ！」

完全に頭に血が上っているのだろう。もう一人の取り巻きが持っていた短剣を抜く。抜き身の刃が光を反射してキラリと光った。そのままトルネに向かって力任せに短剣を振り下ろす・・・が、その手に握っていたはずの短剣の姿はそこに無かった。

振り下ろされた男の手をトルネはするりとかわした。自身が手を添えていた相手を一撃で昏倒させる。うめき声を上げることなく地面に崩れ落ちる男を見事にかわし、振り下ろされたまま行き場を失った男のつかむ。男の腕と比べるとあまりにも細い腕一本で、トルネは難なく男の腕を後ろでひねりあげた。

「いっででででで！！！」

「全く、素手に武器で闘おうなんて卑怯よ。男なら男らしく、公平な勝負をしようという気概くらいみせないよね」

盛大に悲鳴をあげる男の横でソフィは勇ましく腰に手をあてて言った。そんな彼女の元に宙に浮いていた短剣が風に巻かれて、ゆっ

くりとおりにくる。男がそれを振り上げた時、ソフィが風をつかんで取り上げていたのだ。

「……ソフィ、前半部分は僕も賛成ですけど、後半部分は何か少し違うと思いますよ?」

「あれ? そう?」

男の腕を押さえたまま、トルネがあきれたように言った。抜け出ようともがいている男を気にする様子もない。ただ押さえ込んでいるだけなのに両者の力の差は、明らかだった。

「乱暴な手段にでたことは謝罪します。…ですが今日はお仲間と一緒ににお帰り願えませんか? こちらからこれ以上仕掛けるつもりはありませんから」

先ほど兄貴と呼ばれていたリーダー格らしい男に向けてトルネは言った。次いで押さえつけていた男の腕を放す。解放された男はひねり上げられていた腕をさすりながらヨロヨロと後退した。地面に伸びている男につまずき、そのまま座り込む。リーダー格の男は助ける様子もない。

「ですが、そちらから来たときは……容赦はしませんよ?」

静かに押さえられた語調。聞こえたのはソフィとリヤトそして目の前の男くらいだろう。まるで、氷のように冷え冷えとした言葉だった。

「……ちっ、おい、お前ら行くぞ」

「へっ? ちょ、ちよつと待ってくださいよお、兄貴い」

くるりと男はソフィ達に背を向けた。その後ろを未だに目を覚まさない男を抱えて取り巻きがついていく。周りを囲んでいた見物人が道をあけた。

「あつ、ちよつと待って。短剣、置いていっちゃうの? ねえ!」

黙って見送っていたソフィだったが、ふと手の中にある短剣に気づいて慌てて声をかける。だが、聞こえなかったのか、はたまた無視をしたのかはわからないが、三人の男達は雑踏の中へ消えていった。

「あーあゝ。行っちゃった。トルネ、これどうしよう？」

「どうでしょう……？」

置いていかれた短剣をはさんで、二人が思案しているなか、周りでどっと歓声があがった。

「すごいっ、すごーい！お姉ちゃんもお兄ちゃんも格好良かったよ！」

「いやー、まだ若いのに肝が据わっとるのう。たいしたもんだ」

「あいつら、こちらの厄介者なんだよ。鼻をあかせて清々したわ」

「こいつはお礼だ！持っていてくれよ」

ソフィ達の横で飛び跳ねているリヤトを筆頭に、多くの人が二人を賞賛する。それだけではなく、先ほどの声の人のようにお礼だといって、店の商品を渡そうとする人も少なくなかった。

「ちよっ、ちよっと待って！こんなの受け取れないわ。私たちは別に何も……」

「受けとってくんな、お嬢ちゃん。あいつら、腕に物を言わせて誰も手が出せなかったんだ。みんな嬉しいんだよ」

近くに露店を出していた女性が言う。その言葉に同意するように周りの人たちも頷いた。

リヤトを見ると、こちらはこちらで懇願するような眼をしている。ふっ、と口元をゆるめると、ソフィはリヤトと視線をあわせるようにしてしゃがんだ。

「お礼なんて、今の言葉で充分よ。もともと、私は言いたいことを言っただけなんだから」

そう言って、リヤトの頭をなでる。子供特有のサラサラとした髪が指の間を通り抜けた。

「ソフィ」

トルネの声が後ろからして、ソフィは振り返った。林檎を三つ手に持ったトルネが近づいてくる。集まっていた人々が散らばっていくのが見えた。

「ほとんどはお礼を言って、お返ししました。でも、これだけ頂い

てきたんです。三人で食べましょう？」

「やった！さっき見たときから美味しそうだと思ってたのよね♪」

林檎を差し出してみせたトルネに、ソフィが嬉しそうに手を叩く。林檎を一つ手にとって、そっと胸に抱えた。

「リヤト君もどうぞ」

「えっ？いいの？」

パッと顔を輝かせてリヤトが受けとる。勢いよくその赤い果実にかぶりついた彼の顔に満面の笑みが浮かんだ。

その光景を微笑んで見ていたトルネが残った自身の林檎を口に運ぼうとしたとき、どこからか声が聞こえた。

「リヤトー！！どこにいるのー！」

「母さん！！」

それを聞いて、リヤトが声のした方へ走っていく。走ってきたリヤトを受け止めた女性は彼と一言、二言言葉を交わした。そしてソフィ達の方を見るとそのまま頭を下げる。慌てて二人も彼女に向かって頭を下げた。



「お・い・し〜！！サリニヤさん、お料理上手ですね〜♪」

「喜んでもらえて嬉しいわ。まだたくさんあるから、どんどん食べてね」

テーブルの上に並べられた数々の料理を目の前にして、ソフィが幸せそうに頬を押さえる。その様子をにこにこ楽しげに眺めているのは、リヤトの母であるサリニヤだ。

「でも、本当にいいんですか？食事も、泊まるところまで用意していただいて…」

「気にするな、少年！泊まるところは十分にあるし、リヤトを助けてもらったお礼だと思ってくれたらいい。何しろうちの子供達が懐いているんだ。ゆっくりしてゆっくりくれ、な？」

ためらいがちに尋ねたトルネの肩をこちらはリヤトの父親オルガが叩く。バシンツという盛大な音がしたにもかかわらず、トルネは小揺るぎもなかった。その代わりに彼は苦笑を浮かべる。

「…はい、それではお言葉に甘えて…」

「トルネお兄ちゃん、ソフィお姉ちゃん、遊ぼう！」

トルネの声を遮って、リヤトの元気な声が割り込んだ。目を輝かせた彼の手には、妹であるミーシャの手が握られている。この間五つになったばかりだという彼女は、目がくりくりとじていて可愛い。しい。

「こら、リヤト！まだお二人は食事中でしょ！」

「あっ、いいですよ、サリニヤさん。もうお腹いっぱいです。御馳走様でした」

そういったソフィの皿の上は綺麗に片づいていた。同じくトルネの皿の上も空である。彼も微笑んで「大丈夫です」というように頷いた。

「あら、そうなの？でも無理に相手にしなくてもいいのよ？」

「無理になんて、とんでもないです。二人とも可愛いから相手していて楽しいんですよ」

笑ってそう言って、ソフィは席を立った。それに笑い返しながら、サリニヤが食器を片付け始める。

「ふふふ…ありがとう。ーーそういえば、あなた達二人の食事の仕方って、とても綺麗よね。大人でもなかなかできないわ」

「おお、それは俺も思った。貴族の方々っーのは、ああいう食べ方をするもんなのかなあと思ったぜ」

サリニヤの言葉にオルガも肯定した。それを聞いて、ソフィがわずかに身をこわばらせる。知ってか知らずかトルネが一步前に出た。「ソフィのご両親は礼儀に厳しい方達でしたから…。食事の作法も幼い頃から習わされました」

「そ、そうなんです。一人だと嫌になるので、トルネと一緒に食事に誘って…。今ではトルネが一番うるさいくらいなんですけど」

「それは、作法を守らないソフィが悪いんでしょう？」

「失礼ね！守らないんじゃない、忘れちゃうだけよ」

「・・・お兄ちゃんとお姉ちゃんって、兄妹なわけじゃないの？」

突然紛れ込んだリヤトの声にソフィ達は言葉の応酬をやめた。心底驚いたという顔をしているリヤトの横で、ミーシャが兄の真似をしてか「じゃないの？」と繰り返す。お互い顔を見合わせて、ソフィとトルネが吹き出した。

「違うわよ。私とトルネは幼馴染み。まあ、兄妹のように育ったから、間違いではないんだけどね」

「物心ついてからずっと一緒にいましたからね。・・・もうかれこれ十四年ほど・・・」

子供達の前にかがみ込んで、説明を始めるソフィの後ろでトルネが苦笑する。それを脇で聞いていたオルガが感心したようにつぶやいた。

「十四年ってことは少年もそれくらいなのか？その年でしっかり者なんだなあ」

「僕は十六ですよ。別にそれほどしっかりしてるってわけではないですよ」

「いやいや、たいしたもんだよ。俺がそのくらいのときはまだ悪巧みをしては怒られてたもんさ」

オルガの豪快な笑いが部屋に広がる。トルネとサリニヤと一緒に笑みを浮かべる一方で、リヤトとミーシャは「遊ぼう」とソフィをあちこち引っ張り回す。

賑やかな一夜が過ぎようとしていた。



昼間の喧噪が嘘のように静まりかえる夜。潮騒の音がかすかに聞こえ、月の光が降り注ぐ中、ソフィは窓辺に立っていた。月光を受けて、金髪がほのかに輝く。

小さな一人部屋。サリニヤが用意してくれた、その部屋の扉がソフィの後ろで開けられた。少しの音さえも立てず、誰かがそこにたつ。

「眠れませんか？」

「うん、ちよつと気が高ぶっちゃって……。腹が立つ事もあったけど、今日はとても楽しかったから……」

振り返ることもなくソフィは答えた。人がいることに驚いた様子はない。扉から窓辺へと人影が近づいてくる。月光に照らされて、浮かび上がったのはトルネの顔だった。

「驚かれないんですね」

「もう何年一緒にいると思ってるの？いくら気配を消しても無駄」
クスクスと笑うソフィにトルネも笑みを浮かべる。そのまましばらく沈黙が流れ、唐突にソフィが口を開いた。

「明日、帰るわ」

「……………よろしいんですか？」

「何時までも我が儘はいつてられないもの。それにもう大丈夫よ。決心ならついたわ。もう、迷ったりしない」

ソフィが視線を窓の外からトルネへと向ける。真剣な表情を浮かべているトルネの目を真っ直ぐに見つめる彼女に彼は頬をゆるめた。
「大丈夫ですよ、貴女なら。それに、貴女がどれほど迷おうと、私は付いていきますし、微力ながらお手伝いさせていただきます」

「……………ありがと、トルネ」

トルネに再び微笑みかけて、ソフィは彼に背を向けた。

「もう、寝ましょう。明日もあるんだし」

「ええ、そうですね。おやすみなさい、ソフィ」

「おやすみ、トルネ」

来たときと同様にトルネが音もなく部屋を出ていく。それを目の端で見送って、ソフィは用意されたベッドに潜り込んだ。



市場に来る朝は早い。日が昇り切らぬうちから商品を仕入れる商人達のざわめきに起こされて、ソフィ達も早いうちから起床してサリニヤ達の手伝いをしていた。

「サリニヤさん、リヤト君とミーシャちゃんはどうしたんですか？」

「あの子達はお使いよ。日課なの」

ソフィの問いに答えたサリニヤによれば、毎朝の食材等の運搬を彼らにまかせているらしい。今日はいつもどおりそれに行ったと言うことだ。

「大丈夫なんですか？食材って重いんじゃない？」

「リヤカーに乗せてるから大丈夫よ。お店もここから近いしね」

丁度、外から戻ってきたトルネが尋ねる。オルガの手伝いをしていた彼だったのだが、もうそちらは終わったらしい。トルネも加わって、手際よく作業を進めていく三人が和やかに談笑しながら時を過ごしていると、不意に表の方が騒がしくなった。

「？どうしたのかしら…？」

「僕が見てきます。二人はここに…」

といって歩き出そうとしたトルネの言葉が終わらないうちに、ドアがバタンツという音を立てて開かれた。外から入ってきた小さな人影が真っ直ぐにトルネの元へと向かい、彼にしがみつく。

「お願いっ！トルネお兄ちゃん！ミーシャが…ミーシャを助けて！」

リヤトだった。今にもあふれそうな程に目に涙をためている。服にはあちこち砂が付いて、ズボンの膝には穴が空いていた。

「ちょっと待って、リヤト君。ミーシャちゃんがどうしたの…？」

「ミーシャが、昨日の奴らに、連れて行かれちゃった。…お姉ちゃんと、お兄ちゃんを、連れてこい、って…。海辺の広場で待ってるって…」

つかえながら話すリヤトの言葉にその場にいる全員の顔色が変わった。サリニヤは顔面蒼白になり、ふらつとよろめく。それをリヤトの後ろから入ってきたオルガが支えた。

「なんてこった…。こんな…」

「オルガさん達は近くの王国騎士団の駐屯地に連絡してください。
海辺の広場に人を回してもらえるように」

狼狽するオルガに対し、思いの外しつかりした声で言ったのはソフィだった。顔色こそ青ざめてはいるが倒れそうな雰囲気はない。それどころか、駆け出そうとドアの方へ足を向けた。

「トルネツ、行くわよ！リヤト君、場所を教えて！」

「待って、行っちゃダメよソフィちゃん。危ないわ。あなた達が行く必要なんてないのよ」

青ざめた顔のままサリニヤが制止する。その声に少しだけ足を止めてソフィは言葉を返した。

「……ありがとうございます、サリニヤさん。でも、ミーシャちゃんを人質に取るような卑怯者を放っておく訳にはいきませんから」
外に出ていくソフィの後を追うようにリヤトも外に出る。

「リヤト！！」

「安心してください。ミーシャちゃんとリヤト君は必ず無事に連れて帰りますから」

残ったトルネが言う。その声はその場にそぐわず落ち着いたものだった。心配そうに彼を見る両親達を安心させるように微笑む。

「大丈夫ですよ。彼女は招き手です。精力^{エナ}の加護^{エナ}を得、幸運を招く者ですから」



潮の匂いが強くなる。どこか人に懐かしさを感じさせるその匂いが満ちる海辺の広場にソフィ達三人が舞い降りた。ソフィが招いた風の力によって、空を飛んで来た一行は徒歩で来るよりもはるかに短時間で指定の場所に到着した。

「よお、早かったじゃねえか」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべているのは、予想に反して昨日の男

達では無かった。

やや小柄だが、がっしりとした体つきに左腕に特徴的な入れ墨がある。その男の背後に昨日見かけた三人組とぐったりとしたミーシヤの姿があった。

「ミーシャー!!」

そう叫んで駆け出そうとするリヤトをトルネがとめる。ソフィが一步前に出た。

「その子を返して。何がしたいのかわからないけど、その子は関係ないでしょ」

「ああ? ああ、そうだった。ガキを一人預かってたんだっけか。そうだなあ、こいつを返して欲しいんなら、条件をのんでももらえないとな?」

「……………なにかしら?」

大げさに腕を広げて肩をすくめてみせる入れ墨の男に、ソフィは硬い口調のまま尋ねる。その手のひらがギュッと握りしめられた。

「まあまあ、そんなに焦らなくても。まずは自己紹介といこうじゃないか。俺の名はソーン。お嬢ちゃん達のお名前も伺いたいんだけどな?」

「……あなたに教える名などないわ。それより早くその女の子を返してもらえる条件というのを教えてもらいたいんだけど?」
ソーンホルス・アツカの渦の幹部さん?

最後に付け加えられたソフィの台詞にソーンの目が丸くなる。それから楽しげに口笛を吹いた。

「こいつは驚いた。まさか一目で俺らの事がわかるとはな」

ソーンホルス・アツカの言葉をよそにリヤトがトルネに小声で尋ねる。
「黒炎の渦って何?」

「反王国組織だよ。どの国でもひとつやふたつはあるものだけれど、この国では唯一最大の集団。特徴的なのが、幹部クラスの間人間が腕に彫る入れ墨なんだ」

「その兄ちゃんの言うとおりだ。今日はスカウトに来たんだよ。招^エアナ

き手の嬢ちゃんと、腕の立つ兄ちゃんの名」

男から目を離すことなく、トルネがリヤトに教える。ソーンはあっさりとしてそれを認めて、彼らに目的を告げた。ソフィの顔に冷笑が浮かぶ。

「つまり、ミーシャを返す代わりに私たちにその組織に加われと？」

……本当につまらない冗談ね。そんな話に私たちがのると思う？」

「正直言うと思えないな。だが、無駄な争い事は避ける主義なんで淡々というソフィと、ひょうひょうと言ってのけるソーン。そんな両者の間にトルネの声が割り込んだ。

「驚きましたね。左右それぞれ10、後方15。子供相手にそれだけの人数を集めて、穏便に事を進めようというのは、おかしいと思いますけど？」

それを聞いたリヤトが驚いたように目を見開いて周りを見回す。

どこにも人の姿は見えない。

「………本当に、たいした兄ちゃんだよ。ばれたんなら隠してても無駄だな」

ソーンがスッと左手を挙げる。応じるようにあちこちから人の姿が現れた。どれをとっても手に武器を携え、こちらの様子を伺っている。

「つまり、私たちに拒否権はないってことね。……あきれた。風の招き手を甘く見ないで。周りを囲まれたぐらいで臆するような人間じゃないわ！」

言い放ったソフィの言葉と共に風が唸る。突如として巻き起こった突風が周りを囲む男達に襲いかかる。ソーンも昨日の三人組も例外では無く、誰もが腕で顔をかばい身を低くして風をこらえた。

その隙をつくように別の穏やかな風がミーシャをさらう。そのままソフィ達の元にやってきた彼女の元にいち早くリヤトが駆け寄った。同じくトルネが側に寄る。

「大丈夫。眠ってるだけみたいだから」

心配そうにトルネを見ていたリヤトがホッとした表情を見せた。

そんな彼にミーシャを抱えさせるように預けると、彼に手を貸して立ち上がらせる。

「ソフィー!!」

呼びかけたトルネに応じるようにソフィが風をあやつる。渦巻いた風が彼ら四人を宙に浮かせた。

「私たちの目的はミーシャの奪還よ。気は進まないけど、ここは退かせてもらおうわ!」

地上から手の届かない高さから、ソフィが叫ぶ。一方、風に翻弄されるソーンは顔に薄く笑みを浮かべた。

「残念だが、そうはさせられないな」

ソーンは入れ墨の入った左腕を上げ、パチンと一度指を鳴らす。

ー風が熱風へと変わった。ソフィ達を包む統制のとれた風が温められ、暴風となって荒れ狂う。

「つつ!! 危ないっ!!」

風が拡散し、ソフィ達は足場を失う。ギリギリのところまでソフィが地表近くに風を集め、衝撃は多少緩和されたが、完全とは言えずソフィ達は地面にたたきつけられた。

砂浜の砂が舞い上がり、視界が曇る。慌てて立ち上がった三人の目に入ってきたのは、自在にあちこちを駆っているやや黒みがかつた紅の炎だった。

「物知りな嬢ちゃんと兄ちゃんにもう一つ良いことを教えてやるよ。招き手^{エフナ}がみんないい奴だと思わないことだな。俺も含めて黒炎^{ホルス・アッカ}の渦の連中には何人か招き手^{エフナ}がいるんだぜ?」

手のひらの上に炎を集めながら、ソーンは軽い調子で言う。

「しかも嬢ちゃんの属性は風だろ? 俺のは火。火は風を以て強さを増す…。つまり相性は最悪ってわけだ」

ソーンの言葉にソフィが唇を噛む。

精力^{エナ}を招くとは行っても、一般的に扱える属性と言うものは招き^{エナ}手一人につき一属性がせいぜいだ。もちろん属性の優劣もあるわけで、ソーンが言ったのはそれにあたる。しかも火は五属性中、最も

攻撃性が高いといわれており、ソフィ達の不利は目に見えて明らかだった。

ソフィの隣に立つトルネが出来るだけ唇を動かさないようにしながら言う。

「時間を稼ぎましょう。騎士団に連絡はいつているはずです。それまで、持ちこたえられれば……」

「ああ、そうだ。騎士団をアテにしているなら無駄だぜ？別の仲間がこことは正反対の場所で騒ぎをおこしてる。駐屯地にこっちに來れる奴らはいないだろうよ」

万事休す。うつむくソフィの様子にソーンが勝ち誇ったかのように彼らに告げた。

「さあ、あきらめはついただろ？おとなしくこっちに従いな。下手な真似をすれば、そっちのガキたちは火傷どころじゃすまねえぜ？」唇をギュッと結んでリヤトがミーシャを抱く腕に力を込める。険しい表情を浮かべるトルネの脇でゆっくりとソフィは口を開いた。

「……………答えは否^イよ。たとえうわべのみだとしても、この国に反旗を翻すあなた達に従うなんて、私には出来ない相談だわ」

「何…………？」

その明紫の瞳に決意の色を浮かべ、真っ直ぐにソフィがソーンに視線を当てる。そのまま胸の前で両手の指の先を軽く触れ合わせるようにしてそろえ、彼女は言った。

「リヤト君、そこにいて動かないで！トルネ、お願い！！」

「……貴女の望みのままに」

わずかに唇の端を持ち上げ、トルネが前に出る。そして隙のない構えをとると、男達に告げた。

「言いましたよね？……次は容赦しない、と」

「っっ！！お前ら、やっちまえ！」

ソーンの号令にそれまでソフィ達を囲むだけだった男達が一斉に動き出す。輪の中にいる四人に詰め寄ろうとした彼らはしかし一定の距離を残して近寄ることは叶わなかった。

「うがああっつ!」「な、何だ!?!」

突然、足の腱を切り裂かれた男が上げたうめき声に男達の間に動揺が広がる。わずかの間歩みを止めた彼らの武器を何かが奪い取っていた。それだけでなく、男達のあちこちで身体の各所を切り裂かれ、痛みにうめく声があがる。空中で鋼の糸がキラリと光った。

「こいつッ! 鋼糸なんて使えるのかッ!」

驚きに染まった誰かの声が聞こえた。

鋼糸。攻撃、防御、共に優れた武器だ。だがこれは糸というその性質故か、使い手がかなり限定される。よほどの者でない限り使いこなすことは難しい。

それをトルネは見事に使いこなしていた。鋼糸でバリケードを形成し、相手を寄せ付けない。

「調子にのるなよ!」

それでもバリケードを突破し、やってきた男の一人が刀を手にトルネに迫った。トルネが操る鋼糸はバリケードに使われていて、すぐには対応出来ない。勝利を確信した男が振り下ろした刀はガギンッと音をたてて、何かに阻まれた。

「:ふう。まさか落とし物に助けられるとは……」

男の刀を止めていたのは短剣。そう、昨日の三人組が置いていたものだ。左手で鋼糸を扱い、右手で軽々と刀をはじき返す。

「っっ! お前一人でこの人数を相手にしたところでお前らに何が出る!?! この状況を打破出来る方法などないだろう!」

叫ぶ男にトルネはわずかに笑みを浮かべた。

「:それはどうでしょうね?」

余裕の構えを崩さないトルネに男達が圧倒される。そんな彼女の耳に澄んだ少女の声が聞こえてきた。

「:太古よりこの地を満たす尊き力を司る者よ……」

不思議な響きを伴う詞。^{こゝろ}辺りは耳を覆いたくなるほどに音に満ちているのに、しっかりと耳に入ってくる。

「今我が冠せし名に応え、その姿を現し給へ：」
軽く目を閉じ、ソフィはただその詞を紡ぐ。

「灼熱の火。冷涼たる水。宇宙^{そら}渡る風。過激なる雷。重厚なる土」
ソフィの周りを言葉に出来ないような濃密な力が取り巻く。渦巻くように彼女を囲んだそれらの力は次の彼女の詞で収束し、はじけた。

「来たれ！火蓮、水宵、風翠、雷華、土后！」

瞬間、ソフィを中心として五本の柱が立ち上る。それはよく見れば、視認できる程に純度の高い精力^{エナ}だった。

『んゝ。ひっさびさの招喚ね。やっほゝ！ソフィ、元気？』

『そんな和やかな会話をする暇はなからう、火蓮』

『土后のゆうーとおーり！見てわかんない？異・常・事・態！』

『そうよ、火蓮。雷華では無いけれど、ソフィが私たち全員をまとめて喚ぶのはよほどの事よ』

『それは私たちの考える事では無からうよ、水宵。さて、ソフィ？
私たちは何をすれば良い？』

柱の中から現れたのは、手のひらほどの大きさの人によく似た者だった。しかし人とはまるで異なる雰囲気をもつ。赤、茶、黄、青、白のそれぞれの衣をまとうて宙に浮く彼らは揃って、中心のソフィを見た。

「馬鹿な…。精霊を…しかも五属性全部を扱えるなど…」

驚愕に震えるソーンの声。無理からぬ事だ。精霊は精力^{エナ}を司る者達。人々の話に度々のぼるそれらの存在は広く認知されてはいても、目撃したという話は両手の指に余るほど。しかもそれが五属性全部ともなれば、皆無。

『るっさいなあゝ。ねえ、ソフィ。もしかして今回の問題はアレ？』

「うん、そう…。ごめんね、皆まで喚ぶ必要は無かったんだろうけど…」

『何を言う。我等はそなたに従うのみ』

『そう、そう。だいたいアイツらが悪そうなのはよくわかるしいゝ』

『大方、この国に逆らう者達なのだろう？…ソフィには見逃せない輩だな。そういう者には痛い目が必要だと思うがね』

『私も風翠に賛成よ。ソフィ、何でも言って』

穏やかに笑む精霊達にソフィも笑顔を向ける。そして凜とした声で言った。

「国に齒向かう逆賊達に制裁を。土后はその二人の守りを。火蓮はトルネの援護に向かって。残るみんなは私と共に！」

『『『『御意』』』』』

精霊達の声が重なった。

炎が広がる。ソーンの扱うそれとは違う、どこまでも鮮烈な紅。火蓮が放ったその炎は瞬く間に男達の囲みを切り崩した。

『やほー。助っ人だよー』

「心強いですね。ありがとうございます」

トルネの肩にふわりと舞い降りる火蓮。視線を交わした二人はますます勢いを増して、男達を倒しにかかった。

あちこちで砂が盛り上がる。リヤト達の周りを護るように覆うものの他に、砂は倒れた男達の戒めにも思うがままに姿を変えた。

「すごい……」

ぽつりと零されたリヤトの言葉に土后は苦笑を浮かべる。

『そなたを護れとのソフィの言葉だ。怪我などさせぬから、安心してそこにおればよい』

ソフィと三人の精霊達はソーンの元へと走っていた。襲い来る黒炎は片っ端から水宵の操る水が消し去る。

「くそっ！んな事ってあるかよ！」

悪態をついたソーンが炎を大きく膨れあがらせる。

「これで、どうだっっ！」

これまでの中で最大の火炎がソフィ達に迫った。

「水宵、風翠!!」

呼びかけたソフィに応じるように精霊二人がその片手をあげる。招かれた水と風がより合わさるようにして重なった。

『『おゆきなさい、思うがままに』』

精霊達の声と共に火炎と水流が真っ向からぶつかった。

火に剋つのは水。だけれど、攻撃力の高い火では相手ではそれは力の相殺にしかない。しかし、水と風の合力がぶつかるならば…結果は明らかだった。

勢いのままに水流が火炎を消してゆく。完全に火炎を消し去った水の流れはそのままソーンにぶつかった。

「う、おっ!」

くぐもった声を残してソーンが後方に飛ばされる。そんな彼の頭上から大量の水が振り落とされた。あっという間に周辺は水場へと変わる。

地面から身を起こしたソーンが援護を頼もうにも、もう彼の仲間達はトルネと火蓮によって一掃されていた。倒された男達はもちろん土后が拘束している。リヤト達兄妹はもちろんのこと、トルネにも目立った怪我は無かった。

「な、何なんだよ、お前ら。何者なんだよ……。鋼糸を使う小僧とか、五属性の精霊を従える招き手^{エフナ}なんて…」

「…そうね、さっきはああ言ったけれど、自己紹介が必要かしら。これから貴方の裁きの場で顔を合わせるかもしれないし…」

そう言って、ソフィはソーンの真正面に立った。その後ろに従うように精霊達とトルネが立つ。

「私の名はソフィア。シェイレス王国第29代現国王サイフォンが第一子、ソフィア・シェイレスです。

後ろの彼は王国騎士団団長を父に持つトルネ。武術の腕は折り紙付きよ。以後、お見知り置きを」

「ん、なっ!!?」

二の句がつかないでいるソーンにソフィ―ソフィアは形ばかり

の笑みを見せた。

「法の裁きはまだないけれど。貴方の悪行はこの目でしっかりと確認しました。その罪、身を以て思い知りなさい」

そういつてから、ソフィアは最後に一言付け加えた。

「知ってる？水は電気をよく通すのよ？…雷華！」

『合点承知いゝ』

雷華の片手が上がると同時に、晴れ渡った空から稲妻が一筋地に落ちた。



「ソフィお姉…、違った。王女様はどうしてお城から出てきたの？」

「前と同じ呼び方で良いわよ。というより、そっちがいいな」

所変わって、リヤトの家の前。リヤト達家族と共にソフィア達は立っていた。

あの後、ようやく駆けつけた騎士団に後を任せてリヤト達を送って来たのだ。そのとき騎士団員の中に彼女たちを見知った者がいて、一騒ぎあったことはここに述べておく。眠っていたミーシャも今は起きて、母であるサリニヤにくつついていた。

「そうね……。少し城から逃げ出したかったのよ」

「どうして？」

素直に疑問を口にするリヤトにソフィアが苦笑する。

「私ね。もうすぐ十五になるのよ」

その言葉にオルガとサリニヤがそろって納得した様子を見せた。それでも不思議そうなりヤトにトルネが説明する。

「この国では十五才で成人…大人として認められるんだ。そうなる」と正式に王位継承権も与えられる。この国の上に立つ者として責任を持つ立場になるんだ」

「それがちよつと……どころじゃなくすごく重くて。お父様は偉大な王だといわれているからなおさら……。だから少し家出をしたの」

そう言つてソフィアがふふつと笑う。

「でもそうして良かったと思つてゐる。責任の重さは変わらないけど、それ以上にやる気が出てきたもの」

見上げるリヤトに視線を合わせ、ソフィアは彼の頭をなでた。

「ありがとう。すごく楽しかったわ」

「オルガさんもサリニヤさんもありがとうございました。すっかりお世話になつてしまつて…」

「気にするな、少年！ 礼を言いたいののはこっちなぐらいさ」

豪快なオルガの笑いに、ソフィア達の顔にも自然と笑みが浮かぶ。
「こういうのもあれだけれど…。またいつでもいらっしゃい。ご馳走用意して待つてゐるわ」

「おにーちゃん、おねーちゃん、またきてねー」

笑顔で此方をみているリヤト達家族にソフィアが力強く頷く。

「はい！」

それから一ヶ月後。シェイレス王国で王女の成人式が盛大に行われた。

明紫の瞳に金色の髪を持つ少女は国民に心からの祝福を受ける。

その数年後。彼女は女王として国を治めた。前国王「彼女の父王に負けず劣らずの治世をしいた彼女は慈愛に満ちた女王として歴史に名を残すこととなる。」

そんな彼女が招き手である事のひとつの話と共に国民の間に伝わっていった。

それは、彼女が後に彼女の夫となった騎士と五つの異なる属性を持つ精霊達と共に、悪人に制裁を下したという語り継がれる武勇伝。

（後書き）

書いてみたいな、と思っていた作品でした。

設定とかがいまいち微妙ではありますが、作者なりに満足しています。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1895r/>

招き手の少女

2011年2月25日17時55分発行